

---

# 実りの秋の、小さなお話し

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実りの秋の、小さなお話し

### 【Zコード】

Z8681C

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

リスの兄弟・リンとハルは、まだ子供です。お母さんや、近くの  
民家に住んでいる、猫のタマばあちゃんから、色々な事を教わりま  
す。今夜は、月がとってもきれいに見える、特別な夜だと、タマば  
あちゃんから教えてもらい、お月見に行くことにしました。幼いリ  
スの兄弟が、住処の森で元気に生活する、いくつかの出来事を、お  
話にしました。

## 一つの話題（前編）

小学一年生から二年生のみなさん、みんなおもひたりと想い、少しおかしいなってあります。携帯から、よんでもくれる方にね、少し、よみにくいかもしれません、『めんなさい』。

## 1つめのお話

### 1つめのお話し 『お月見』

僕の名前は、リン。 僕のおつちは、森の中にあるんだ。 お兄ちゃんと、お母さんと、お父さんが、一緒に住んでいるよ。

僕の耳は、頭の上にあるよ。 目は、くりくりしていて、大きなシツボがあるんだ。 シツボは、木から木へ飛び移るとき、鳥さんの羽みたいに、とっても大事なの。

手と足のゆびには、ジョウブなツメがあつて、木登りするときは、幹をしつかりつかんで、おっこちないようにするんだよ。歯もジョウブで、生えはじめてからは、ずーっと伸びつづけるのかたいクルミの実のカラだつて、ガジガジして、割つちやうんだ。スゴイでしょ？

僕たちのこと、人げんは、リス、つてよんでいるんだつて。近くの民家に住んでいる、猫のおばあさんが、教えてくれたんだ。猫のおばあさんは、おうちの人たちから、タマつてよばれていたよ。だから僕たちも、タマばあちゃんつて、よんでいるんだ。

タマばあちゃんは、とってもモノシリで、僕たちに色んなことを教えてくれる。 僕は、お話しを聞くのが、大好きなんだ。お兄ちゃんのハルは、お話しの途中で、いつもお昼寝しちゃうけど。

ひなたぼっこしながら、おばあさんのお話を聞くのが、タイクツなんだって。 お外で遊びまづが、よっぽど楽しいって言つてる。 そうかなあ？

タマばあちゃんが住んでいる、おうちの庭には、大きな金木犀の木があるんだ。

ちょうど今じろは、小さなオレンジ色のお花が、きれいに咲いているよ。スマイ匂いがするんだ。甘くて、おいしそうな匂い。でも、お花は食べられないけどね。僕たち兄弟は、その金木犀の木が大好きなんだ。よく遊びに行くよ。

「今夜は、中秋の名月」って言って、お月様が、とってもキレイに見える特別な日なんだって。タマばあちゃんが教えてくれたよ。だから、今から、いつもの金木犀の木まで、遊びに行くことにしたんだ。  
お空は少し曇っていて、お月様がちゃんと見えるか、ちょっとシンパイ。

「おうちを出るとき、お母さんが僕たちに言ったよ。『あんまり遅くならないのよ。明日は、早起きしなくちゃ、ならないんだから』」

明日は、僕たちの大好物の、オニグルミの実が、食べごろになるまで、あと、どれくらいかかりそうなのか、お母さんに教えてもらつたために、朝早くおうちを出る約束なんだ。

僕たちは、「はーい」と返事をして、元気に、木のおうちを飛び出した。

お兄ちゃんは、木から木へ上手に飛び移る。先に行って、僕を

大きな声でよぶんだ。

「リン、遅い、遅い！　おいでっかやつだ！」

「まつてよ！」

僕は、少しコワガリだから、お兄ちゃんのよつこ、ピヨンピヨンとは飛べないんだ。

足もとの枝が、太くてシックカリしているのと、飛び移るといの枝が、ジョウブそなうかどうか、ちゃんと見てからでないこと、ハロへて飛べないよ。

わ！ お兄ちゃんが、いそがせるから、足がすべったよ！ 足が枝からおちちやつて、ぶらぶらしている……。 ハロによお

……。

イツシヨウケンメイ、枝に手のツメを引っかけて、しがみついた。

「…お兄ちゃん！ タスケテ！」

「リン！ がんばれ！」

僕が、うーん、うーん、つて、2回、声を出してがんばつていたら、つかまつていいる枝が小さく揺れて、お兄ちゃんが来てくれた。

「ひっぱるからな！」

お兄ちゃんが僕の手をもつて、えい！ つて、ひっぱっててくれた。足のツメも枝に引っかける事ができて、足と手のチカラで、やつと枝の上<sup>うえ</sup>にもどれたよ。

「ふー、たすかつた」

「もう、ちょっとで、金木犀の木につくから、行こ！」

お兄ちゃんがそう言つて、さつきよつもゆつくりと、先の枝へ飛んだ。 やつと、僕も追いつめる速さだ。

金木犀の木についたら、タマばあちゃんが、おうちのエンガワで、毛づくろいしていたよ。 僕たちを見つけて、のんびりと顔をかけてきた。

「来たね、リスのイタズラつ子たち。 空をじらはん、もうすぐ雲がはれて、きれいなお月様が顔を出すよ」

「ほんとに？」

僕とお兄ちゃんは顔を見あわせて、それから一緒に、お空を見上げてみた。

お月の色は、雲の白っぽい灰色がおかつたけど、紺色のすき間ま  
があつて、そこへ、お月様の青白い頭が、少しだけ出て來た。  
雲の間から、じつそり僕たちを、のぞいているみたいだ。

「僕たちちはコツくなによ、ちゃんと、お顔をみせてください  
「友だちにならう?」

僕とお兄ちゃんが、ちよつと大きな声で、お月様に話しかけていた  
ら、タマばあちゃんが笑わらつて言つた。

「お月様に、ちゃんと声はどうこいたかな?」

「あー」

「ちゃんと、どうこっているみたいだよ? わつかよつ、いっぽい顔  
を出した!」

ちよつとだけ長ほそい形ながかたちをした、丸いお月様が、雲の間から、顔  
をしつかり出してくれたよ。きゅうに、まわりの景色けしきがキレイに  
見えはじめた。

「お月様、スゴイね! わつきまで真まっ暗くらだったのに、ほら、タマ  
ばあちゃんの顔も、お兄ちゃんの顔も、わつかよつ、ずーっとハッ  
キリ見えるよ!」

「金木犀の花も、キレイに見えるな。」

お兄ちゃんはそう言つて、お花のいい匂においを、おなかいっぽい、す  
い込んだ。

「うーん、おいしそう……」

「お花は、食べられないよ」

僕が言つたら、お兄ちゃんがイタズラするとき、みたいな顔をして  
言つたよ。

「けど、ミツはすえるよ?..」

小さなお花を一つ取つて、お花のうらがわに、口をつけている。  
チコつていう音おとがして、お兄ちゃんは、うれしそうな顔をした。

「甘あまくて、おいしい!」

「え? そうなの? 僕も!..」

僕も同じようにして、ミツをすつてみた。

「ほんとうだ！　おいしい……」

お兄ちゃんと一緒にすやすや花のミツをついていたら、タマボ  
あちゃんが言ったよ。

「あなたたち一人は、花よりだんご……。こせ、名月よじも花のミツ、  
だね。やれやれ」

そう言って、ちよつと笑っていた。

花よりだんごって、なんだ？　って、ちよつと想ひたけど。まあ、  
いいか。

金木犀のお花のミツはおいしい、お月様の青白い光はキレイで、  
僕たちはつい、夜ふかし、してしまったよ。おうちに帰つたら、  
お母さんにおひいられちゃった。

早く帰つてくる、ヤクソクしていたんだった。……お母さん、  
「めんなさい」。

## 2つめのお話

### 2つ目のお話 はな 《クルミの森》

朝、お母さんに起<sup>は</sup>された。いつもよりも早かつたから、くつついたマブタが、なかなか、はなれてくれなかつたよ。ちょっとしてから、やつと思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>した！

「そうだ、オニグルミの木！」

見に行くんだった。僕はとなりで眠<sup>ね</sup>つているお兄ちゃんを、あわてて起こした。

お外へ出<sup>で</sup>ると、まだお口様<sup>ひさま</sup>は出でていなくて、お空の東<sup>ひがし</sup>の方<sup>ほう</sup>が、うすいピンク色に光<sup>いろ</sup>ひかつっていたよ。ちょっと涼<sup>すず</sup>しくて、お兄ちゃんと二人で、ブルブルつてふるえちゃつた。

「あ、行くよ。途中で小川<sup>おがわ</sup>におちないよう<sup>とう</sup>に、気<sup>き</sup>をつけ<sup>て</sup>」

お母さん<sup>おはなさん</sup>に言<sup>い</sup>われて、お口様<sup>ひさま</sup>の出でくる方へ向<sup>むか</sup>つて、ピヨンピヨンと飛びはじめた。

いくつも枝<sup>えだ</sup>をけつて、ちょっと行くと、僕たちがいる木の枝<sup>い</sup>と、飛び移る先<sup>さき</sup>の木の枝<sup>い</sup>の間に、サラサラと音<sup>おと</sup>をさせて、水<sup>みず</sup>が流れ<sup>なが</sup>れる、小川があつたよ。

「ここまでくれば、もうすぐ、そこよ」

お母さんが、ちょっと止<sup>と</sup>まって、僕たちに言<sup>い</sup>つたよ。小川を見て<sup>は</sup>いるとい、少しだけ色のついた、モミジの葉<sup>は</sup>っぱが、3枚<sup>まい</sup>、流れ<sup>き</sup>きた。

「赤いモミジが流れはじめたのなら、クルミの食べじゆも、もうすぐね」

そう言<sup>い</sup>つて、お母さんは小川の向<sup>むか</sup>い側<sup>がわ</sup>へ、ピヨンつて飛んだ。お兄ちゃんがすぐにおりかけたよ。僕は、ちょっと口<sup>くち</sup>ついて、止<sup>と</sup>めた。

まひやつた。

「リン…ちょっと枝の上を走って、イキオイをつけたから、思いつけり、けつとばすんだ！」

小川の向こうから、お兄ちゃんが大きな声で、教えてくれた。

「……うん、わかった。やってみるよ」

僕は、お兄ちゃんに言われた通りに、ひょりと走ってから、えい

！ つて、思いきって、枝をけつた。

「うわあ！ いつもより、長くお空を飛んでるみたい……！」

「ビューン、スタ！ つて、向こう側の枝についたら、イキオイがつき過ぎちゃって、おつとつと… つて、おつこちやになっちゃつた。

すぐにお兄ちゃんが来てくれて、僕の手をつかんでくれたよ。

ほつ。

「えらい、えらい！ やればできるじゃないか！」

お兄ちゃんがほめてくれた。えへへ。ちょっとうれしい。

「リン、よく、がんばったね」

お母さんもそばに来て、ほめてくれたよ。 わーい！

「さあ、あとは小川の流れしていく方へ、もう少し行ったら、オーネグルミの木の森よ」

僕たちは、お母さんのあとを追いかけて、もう少しだけ、木の枝をけつて行った。

小川と一緒に飛んでいるみたいだつたよ。 いつもとチガう感じで、クルミの森まで行くのは、とっても楽しかつた。

進んでいくうちに、大きな川が流れている音が、聞こえはじめた。

「ほら、あの木が、オーネグルミの木よ」

ちゅうと先の木をさして、お母さんが教えてくれた。葉っぱがいっぱい、ついている間に、みどり色の丸い実が、「△か△くらはずつ、まとまつてくつしているの。

「ここのあたりの木は、まだもうちゅうと、時間がかかりそうね。もつ少し川の近くへ、行つてみましょ！」

もつ少し先へすすんでいくと、大きな川が、木の枝と葉っぱの間から、見えはじめたよ。まわりの木は、もう全部ぜんぶクリミの木だつた。

「ここの辺は、あさつてくらには、もう食べられそうね」「お母さんが教えてくれた実は、さつき見たみどり色の実よりも、ちよつと茶色つぼかつたよ。そつか、茶色の実が、食べられる実なんだ！」

「じゃ、もつ少しさがして見よう！」

お兄ちゃんが言つて、となりの木へと、ピヨンつて飛び移つた。

「やうだね、よくさがして見たら、ここのは、食べられる実が、見つかるかもしれないね」

お母さんがそつと語つたから、僕もさがして見ることにしたんだ。

お兄ちゃんのあとを追いかけて、なるべく枝が近いところをさがして、ピヨンつて、飛び移つた。

少しだけまわりを、キヨロキヨロと見てみたら、さつき見つけた実よりも、もつと茶色の実を見つけたよ。

「あー、これ、さつきのよりも、色が△△よー。」

「どれどれ？」

そう言つて、お母さんが僕の近くへ、ピヨンつて、飛んできた。

「本当に、これは、明日には食べられそうだよ」

「え？ これでも、まだダメなの？」

「明日、ここの実を見てみたら、どれくらいのが食べられる実か、わかるわよ」

「そっか、じゃあ、なんか、シルシをつけておーじうー。」  
僕はちよつと、かんがえて、まわりの葉っぱを一枚、半分にちぎってみた。

「リンは、かしーこーね。」  
「うわー！」  
「つかるね」  
お母さんがニッコリとして、僕の頭をなでてくれた。えへへ、い  
い気持ち。

「うわー！」  
「ちょっと遠いところから、お兄ちゃんの、わけび声がした。  
「どうしたの？！」  
僕とお母さんは、あわてて、お兄ちゃんの声がした方へ、枝の上を走つて行つた。

あー、お兄ちゃんが、手だけで枝にぶら下がつてゐる。  
「足、すべっちゃつたよー！」

「ダイジョウブ？！」

「へーキだよ！」

足を思いつきり、ブラブラとして、イキオイをつけ、お兄ちゃんが、さかあがり、した。

「えい！」

かけ声と一緒に、ぐるりんつて、枝の上にもどつちゃつたー。ビックリ！

「ボクはリンとはチガうからね。これくらい、へーキだよー。」

イタズラしたときみたいに、自信マンマンな顔をしたよ。

「ハルは、体を動かすのが得意だね。」リンは、かしーこー子だから、一人でチカラを合わせれば、どんな事でもできるよ、わつと

お母さんがそう言つて、カンシンしていたよ。

それから、もう少しさがしてみたけど、今日はまだ、食べられる

実は見つけられなかつたんだ。

おうちに帰る途中で、小川のところまで来たら、お母さんが言つたよ。

「赤いモミジの葉っぱが、一度に6枚か、7枚、流れてきたら、あのクルミの森の実は、食べられるようになるわよ」

「じゃあ、お母さんは、行くときに見た葉っぱで、まだ食べられないの、しつていたの？」

「わたしたちの住んでいる森の仲間なかもが、色々な事を、教えてくれるよ。それを、リンもハルも、覚えておくのよ」

「はい」

僕は、返事をしたけど、お兄ちゃんは、ちがつたんだ。

「だつたら、今日は行かなくても、良かつたんだ」

「ちよつと、フマンそとに、そう言つた」

「だけど、行き方は覚えられたでしょ？ 一人とも、クルミの森の近くには、大きな川がある事をしつたのだから、クルミを食べに行くときには、じゅうぶん、気をつけるのよ」

「じゃあ、ボクたちだけで、行つてもいいの？！」

きゅうに、お兄ちゃんのゴキゲンが、なあつちやつた。

「一人で行くのは、ダメよ。リンは良くかんがえて、お兄ちゃんを、タスケテあげるの。ハルは、リンのことを良く見て、あぶない事がないように、ちゃんと、弟おにいさんを守まつつてあげてね。それがヤクソクできるのなら、一人で行つてもいいわよ」

「やつたあ！」

僕とお兄ちゃんは、元気にさけんじゃつた。お兄ちゃんは、チヨ

ウシにのつて、枝の上で、くるりんつて、ちゅう返りをしたよ。

僕は、ちゅう返りはできないけど、そのばしょで、ピョンピョンと、飛びはねたんだ。

次の日は、僕とお兄ちゃんだけで、クルミの森まで行ってみた。  
昨日はコワかつた、小川の上の枝も、今日はヘイキで、ピヨンつ  
て、飛びこえられたよ。

小川には、5枚の赤いモミジの葉っぱが、流れてきていたんだ。

クルミの森についたら、僕は昨日、シルシをつけてあつたから、  
すぐに茶色の実を見つけられたんだ。すごいでしょ？

お兄ちゃんは、イッショウケンメイさがして、1つだけ、食べら  
れる実を見つけたよ。カラがかたくて、どうやつたら、上手に割じょうす  
れるのか、わからなくって、二人で1つずつ、茶色の実を、もつて  
帰つたんだ。

おうちで、お母さんに上手な割り方かたを、教えてもらつたんだ。

はじめて食べたオニグルミの実は、とっても、おいしかったよ！

今日は帰つてくる前に、また明日、食べごろになりそうな実を、  
見つけておいたんだ。やっぱり、まわりの葉っぱをちぎりて、目  
ジルシをつけてきたよ。

明日は、モミジの葉っぱ、6枚くらい流れていかないかな…？ と  
つても、楽しみ！

## まつめの話

### 3つ目のお話し ≪冬が来る前に≫

だんだんと、空気が冷たくなってきた。お父さんと、お母さん  
は、僕たちが眠っているベッドの木の皮を、もう少し取つてこつけ  
かと、朝からソウダンしていたよ。

僕とお兄ちゃんは、毎朝かなづ、オーブルミの木の森まで、出で  
かけているんだ。

昨日も、その前も、途中の小川には、赤いモミジの葉っぱや、黄  
色いイチョウの葉っぱが、いっっぽい流れきていたんだ。と  
つても、キレイだよ。

クルミの実も、食べきれないくらい、取れるようになつたんだ。  
だから、いつも、お腹いっぱい食べてくるんだよ。えへへ、と  
つても、しあわせ。

クルミって、どうして、あんなにおいしんだの?  
今日もお兄ちゃんと、くるみの森まで行つてくるんだ。いくつ  
くらい、食べられるかな?

小川をとびこえて、クルミの森へ行く途中で、お空の雲が、おお  
くなつてきちゃつた。

「あれ? なんだか、しめつた匂いがするね」

僕は、枝から枝へ飛び移るのをやめて、お兄ちゃんに言った。

「雨、ふりそうだ」

お兄ちゃんも止まつたけど、すぐにまた、つせの枝へぱぱんつて飛  
んだ。

「ねえ、今日は帰るよ?」

大きな声で叫んだけど、お兄ちゃんは、じぶん先へ行っちゃつた。

「へーきだよ！ 雨、ふる前に帰つてくれば…」

お母さん、「一人で行っちゃダメだって言わっていたから、僕はお兄ちゃんのあとを追いかけたよ。だけど、ほとりは、すでに帰りたかったんだ。

だって、僕はお母さんから、すべく、かんがえてって、おねがいされていたから。

クルミの森へつく前に、ぽつん、ぽつん、つて、雨がふつてきちゃつた。

「ねえ！ お兄ちゃん！…」

もう一回、大きな声で、お兄ちゃんをみただけど、お兄ちゃんは、止まってくれなかつた。

「これくらいなら、へーき、へーき！」

そう言つて、どんどん、先の枝へ飛び移つて行つちやつた。

だんだん、雨がつよくなつてきたよ。パンパンして、つぎの枝に飛び移つたら、足がすべつちやつた……！

「あわわわ！」

雨で枝がツルツルする。僕はどんどん、飛び移るのが遅くなつちやつたんだ。

やつと、お兄ちゃんに追いついて、クルミの森へついたけど、お兄ちゃんが見つからない。僕はあわてて、茶色くなつてきた、葉っぱの向こうがわを、さがしてみたよ。僕たちの体は、木の皮や、秋の葉っぱと、そつくりな色だったから。お兄ちゃんを、さがすのは、タイヘンだった。

すべらないように、元気をつけながら、いくつも枝をけつた。

「あと、もう少し……」

お兄ちゃんの声がした。 僕は、声のする方へ、行つてみた。

少し、とおい所にある、オーブル川の実を、お兄ちゃんはイッショウケンメイ、取ろうとしていたんだ。雨で、枝がツルツルだから、ちよつとずつ、ちよつとずつ……。

枝の下にある、大きな川の水が、いつもよつ、いっぱい流れていだ。

「お兄ちゃん、あぶないよー！」

僕は、つこい大きな声で、言つちゃつた。 わしたら、僕の声にあどりこいて、お兄ちゃん、足がすべっちゃつたー！

「うわーーー！」

「お兄ちゃんーーー！」

僕の田の前で、お兄ちゃんは、枝からすべつて、川に落ちしちたー！

「お兄ちゃんーーー！」

もう一つ、大きな声でよんだナビ、お兄ちゃんの声、せいぜないよおーーー、どうしよう？ーーー

僕は、あわてて、木から地面じあんにおりた。 枝から枝へ飛び移つたら、きっととまた、ツルツルすべつて、あぶないと思おもつたんだ。

川の流れているほうへ、走つて行つた。 お兄ちゃんが、水上うえに、顔を出した！

「……リン……！」

ぶくぶくつて、しながら、お兄ちゃんが僕をよんだ。

「お兄ちゃんーーー、ビーットヨウ……？」

お母さんと、お父さんのこと、思い出した。 ビーットヨウの？

！ お父さん、お母さんーーー

川に流されて、お兄ちゃんが、どんどん、はなれて行っちゃう……

「誰かあ！！ タスケテえ！！ お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……」

「！」

僕は泣きながら、大きな声で、誰かをよんだ。 お兄ちゃんを追いかけて、イッショウケンメイ走った。

つまづいて、イキオイで、前に口ロロロロロがつちゃった。 イタイよお……。

「おーい！ デリしたんだ？ リスの子供……」

上のほうから、声がした。 僕はキヨロキヨロして、頭の上を見た。

今、僕が走つてきたほうから、バサバサつて音がして、フクロウのお兄さんが、近くの木の枝にとまつた。

「雨の音が氣もなくて、やっと部屋で眠りかけていたのに、お前の声がうるさいくて、目が覚めちまつたよ」

フクロウのお兄さんは、頭をクルクルと回した。

「あの、僕のお兄ちゃんが……、川に、落ちちゃって……、あの、タスクテください……！」

「なんだって？！」

眠そだつた目をパチチリ開いて、フクロウのお兄さんは、バサバサつと音をさせて、空へ飛んだ。

「まつてな！」

そして、川の流れしていくほうへ、スゴイ速さで飛んで行った。 僕も、追いかけて、走つていった。

フクロウのお兄さんは、ものすごく速くて、追いつくことは、出来なかつたけど、チョットとおへで、川に向かつて、真っ直ぐ下りていくのが見えた。

水しぶきが上がつて、バシャツつて音がして、また空へ飛び上が

つていいく。

「あー、お兄ちゃんこーーー！」

フクロウのお兄さんは、お兄ちゃんを、シッカリとつかんでいたんだ！

……スゴイーーー！

そのまま、クルリと向きをかえて、僕のほうへ飛んできた。

僕は、思いつきりジャンプした。ピヨン、ピヨンって、なんか

いも、なんかこも。

フクロウのお兄さんが、お兄ちゃんをつれて来てくれた。地面

にお兄ちゃんをおろして、チヨンチヨンって、少しだけ、お兄ちゃんのお腹をつついた。お兄ちゃんは、田を見ました。

「お兄ちゃん！ よかったーーー！」

お兄ちゃんは、すぐに起き上がって、体をブルブルつしてして、水を飛ばした。

「どうやら、何ともないみたいだな

フクロウのお兄さんは、そう言って、僕たちをもう一回、シッカリと見た。

「お前たち、ゲンタさんの家の、ハルとリンか？」

「うん、そうだよ。お兄さん、僕たちのお父さん、じっこいるの

？」

「オレのオヤジさんが、ゲンタさんの友だちなんだ」

お兄さんに言われて、僕はお兄ちゃんと顔を見あわせた。

「どうやら我也、ひびくなつてきそうだ。家まで、送つて行つて

？」「まむ

そう言って、僕とお兄ちゃんを、背中に乗せてくれた。

「落おちなこよひ、たゞひに、シッカリと、つかまつているんだぞ？」

バサバサつて、大きな羽の音をねじり、フクロウのお兄さんせ、空へ飛び立つた。

「うわあ…！　スゴイ！　はやこ…！」

雨が体にぶつかってきたけど、そんな事ば、あんまり氣にならないくらい、スゴク氣もちよかつたんだ！　お兄ちゃんも、スゴイ、スゴイつて、なんども大きな声で言つていったよ。

こいつもの半分の時間で、お家につこりやつた…！

お家のある木の枝に、僕たちをおひしくてくれた。

「あの、ありがとうござりました」

僕とお兄ちゃんは、やつとフクロウのお兄さんに、お礼を言つた。

「ハルはワンパクだつて、聞いていたけど、あんまりムチャなこと、するなよ？　じゅあな」

お兄さんはそう言つて、すぐに飛んで行つちやつた。

「いや、ずいぶんど、ふつてきててしまつたな」

お父さんの声がして、僕たちは向むきをかえた。

「お父さん、今、帰つてきたの？」

「一人とも、ビショビショね。」

お父さんの後から、お母さんも顔を出した。　僕とお兄ちゃんは、お母さんに抱だきついた。

「お母さん…！」

「ママかつたよ…！」

さつままで、フクロウのお兄さんの背中で、とっても氣もがよかつたのじ、急にお兄ちゃんが川に落ちちやつたこと、思つ出しちやつたんだ。

僕とお兄ちゃんは、お母さんを抱きついて、ワンワン泣き声を出しだした。

やつた。

「あらあら、一人とも、心うしたの？」

取つてき木の皮を、お父さんに渡して、お母さんは僕たちの頭を、なでてくれた。

お家の中で、今日あつたことを、話したら、お父さんはおじりわけちやつた。

「雨の日は、枝がすべりやすくなつていてるんだ。ムチャをするんじやない」

だつて。フクロウのお兄さんにも、同じことを言われたけど。

「とにかく、一人とも無事で、ほんとうによかつたわ」

お母さんはそう言って、チヨシトだけ、泣いちゃつた。

お兄ちゃんと僕は、お父さんと、お母さんとあやまって、いっぴい、ハンセイした。

おじられたよ、お母さんが泣いちゃつたのが、スゴク悲しかつたんだ。

今日は、雨がふつていたから、夜もチヨシトさむかつた。いつやつて、だんだんと、さむい冬が近づいて来るんだ。  
そろそろ冬の「」飯を、地面につけはじめないとならない見たい。

明日、天氣てんきがよかつたら、クルミをこつぱい、取つておじりわけ思つた。

実りの秋の、小さなお話し　おわり



## まつものお話 (後書き)

よんでもぐださつて、ありがと「わざこまし」た。  
童話は、はじめて書いたので、よんでもぐださつた方たちが、  
どんなふうに思つてくれるのか、チョット、シンバイですが・・・。  
よかつたら、感想を、おしえてくださいね。

追記) 11月7日 少し、読みやすくなるよつこ、改行をひり  
とだけいじりました。  
内容は、特に変わつておりません。 変更・更新は、これ以降、  
しないと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8681c/>

---

実りの秋の、小さなお話し

2010年10月11日20時24分発行